

事例研究

角野 幸子

NECシステムテクノロジー株式会社

第一ブロードバンドシステム事業部

マネージャ

「勝つんや活動」の発展

～ビジョン共有と文化醸成～

講演概要

対応プロジェクトも勤務地もバラバラなメンバが3年にわたり実践してきた活動「勝つんや活動ー強く楽しく挑戦する個人と組織づくり」によって一体感をもちながら現場改善活動の当たり前化を実現してきた（2009年S.P.E.S発表）。その後この活動は「全員で勝つ」というゴールに向け次のステップへと発展し、自組織の文化醸成から会社全体への波及へと広がってきた。現場改善活動という直接的な活動から長期視点のゴールに向けどのように発展してきたかについてをご紹介します。

=ビジョンの共有=

現場改善活動は当たり前になったものの小さな成果の積み重ねや実質的な効化を実感できない中で改善活動の共有イベントに停滞感が始まっていた。そこで何のための活動なのかの根本的な意味をしっかりと共有することを実施した。全員で勝つとはどういうことなのか？会社のビジョン、個人のビジョン、チームのビジョン、それぞれを摺り合わせてみて何が見えるのか？非日常に一旦身を置き、個々人のビジョン、チームのビジョン、会社のビジョンを映像を確認し、その後チームビルディングでチームとは何か？組織とは何か？を体感から感じとり、対話を通じてそれぞれの方向性を見つけアクションプランに落とし込んでいった。このような1年に一度のイベントにより、軸のぶれない活動に発展していった。

=文化醸成=

成果発表による情報共有とフィードバックは同様の施策や成果が増えるにつれ形式的になる傾向があった。そこで成果発表という形をやめ、自慢会というスタンスでの場としより本音でより具体的な情報の共有ができるようになった。この対話形式での意見交換は改善活動の成果共有のみならず予算キックオフの後の意見交換会や部会など会議の場でも応用され、短時間に楽しく効率よく具体的な情報共有が実践されるようになった。ワールドカフェ式の対話他東京大阪をTV会議で結んで一体感ある対話の場を創るなど毎回工夫がなされ、勝つんやによる組織文化が醸成されていった。また、現場改善活動という視点だけでなく「全員が勝つ」ための活動であれば良いとの発想で社会貢献活動やCS活動など活動の種類も広がっていった。

＝組織をこえた発展＝

外をもっと知り自分たちを知る、そして協働の輪をひろげていきたいという意思が芽生え自分たちの組織以外の部門や他社との意見交換会を活発に行うようになった。学びあうというスタンスで自分たちにはない改善活動から学び自らの活動に活かしていくという流れが定着してきた。また協働として会社全体を活発化させようと働きかけ組織をこえた連携でのイベント企画を実施するようになった。

S2a

7月28日

10：30～11：15

会議室A

All Rights Reserved, Copyrightc 2011,JISA